

トビウオ通信 (8月号)

<http://www2.pref.shimane.jp/suisi/> (TEL 0855-22-1720)

《 水産物のブランド化を加速する「トレーサビリティシステム」の構築 》

水産物のブランド化は本県が取り組むべき重要な課題の一つです。今回は「トレーサビリティ」や「ICタグ」といった聞き慣れない言葉がブランド化とどういう関係にあるのか紹介したいと思います。

「トレーサビリティ」とは？

「トレーサビリティ」は「trace」(追跡、足跡)と「ability」(可能性、能力)との造語と言われています。一般的には「追跡可能性」と表現しているようです。例えば水産物の「トレーサビリティ」と言えば、「漁師さんが魚介類を獲った状況から水揚げ、流通、消費に至るすべての段階の品質管理実態記録を明らかにできること」になると思います。そしてその記録情報を直接的あるいは間接的に取り出すために「ICタグ」(ICチップを埋め込んだ荷札)を媒体として利用するのです。現在はまだ、「ICタグ」のコストが高く、水産物への適用を実施するには至っていませんが時間の問題でしょう。国際的にも「トレーサビリティシステム」の構築は、IT化の進展とともに急速に現実化する様相を示しています。

水産物への「トレーサビリティシステム」の適用により、水産物の生産から流通・消費に至るところで未曾有の大変革が起こることが考えられます。一方、低迷する本県水産業界は漁業の段階から高度な品質管理を行い、地域水産物のブランド化を確立するチャンスとして、この変革を積極的に取り組むことが重要でしょう。

これまで、不透明であった水産物の流通システムをラインで結び、ネットワーク化することで「トレーサビリティシステム」を具現化しようとするプロジェクトが始まりました。今年度から3年間の期間で実施する、水産庁の委託事業「ブランド・ニッポン」漁獲物生産システム開発事業です。島根県的美保関町漁協がそのモデル地区として「トレーサビリティシステム」の実証地区として選定されています。

ブランド化への取り組みと問題点

農林水産物のブランド化については、県や市町村を挙げて各地域での取り組みはもとより、マスメディアなどの媒体を通じて、何とか島根県の質の良い産品を県外消費者に認知してもらおうと、様々な手段を講じています。しかしながら、都会の消費市場には、日本一美味しいと謳ったありとあらゆる農林水産物が溢れているのが現状で、島根県産品を売り込み、高い評価を得るには相当の時間と労力を要すると思われます。

島根に限らず、日本全国の産地で丹精込めてつくり育てた農林水産物は、収穫(漁獲)当初、確かに鮮度も良いし、品質も最上のものです。しかし、収穫時(漁獲時)の処理法や競り後の取り扱い、消費者市場から消費者の口に入るまでのどの段階においても最高の品質管理が為されなかったとすれば、風味が落ちてしまいます。ただ風味が低下するだけなら、安価な値段の設定で売れるかもしれませんが、不適切な取り扱いにより、食中毒の憂き目に会うかもしれません。こうなるとは、消費者のみならず、生産者、流通関係者が受ける被害は甚大になるのは必至です。

ブランド化の推進と確立は、その商品自体が本来持つ特殊性(例えば脂質含量が高いなど)だけではなく、高度な品質管理の実践があって、その商品を買う消費者が欲しい情報提供を店頭で瞬時に得られることで成り立つと言っても過言ではありません。特に携帯電話の普及やインターネットの利用者数が激増する中で、これらのデジタル機器を利用することで「トレーサビリティシステム」の構築と実用化はそれほど難しい問題ではないと思われます。

食に対する消費者の厳しい目

今、消費者は何を求めているのでしょうか。消費者ニーズが多様化しているのは事実ですが、大きな流れとして、「食」に関しては、健康保持を強く意識した行動をとることが日常生活の中で多くみられます。ダイエット、成人病予防等々、健康に関係する成分を含有している飲食物、多くの健康機能性食品等が市場に溢れています。また、消費者は時折、過激な行動を起こします。例えば輸入「ウナギ」に見られるように、一部の製品で使用禁止の抗生物質が検出されて以来、中国産ウナギというだけで全く売れない状況になり街の店頭から姿を消し、代わりに国産ウナギが多く陳列されるようになりました。

トレーサビリティシステムの構築の重要性

本当に安心できる食生活を営むためには、消費者が十分な情報を即座に得ることで、日々の生活の中で納得できる食品を購入できる環境が必要なのはいうまでもありません。そのためには、消費者が欲しい正確な情報を生産現場まで遡って認知し得るシステムを構築できれば、多岐にわたる消費者ニーズに対応できることになると思われます。このシステムが「トレーサビリティ」の基本思想です。

ICタグが何故必要なのか？

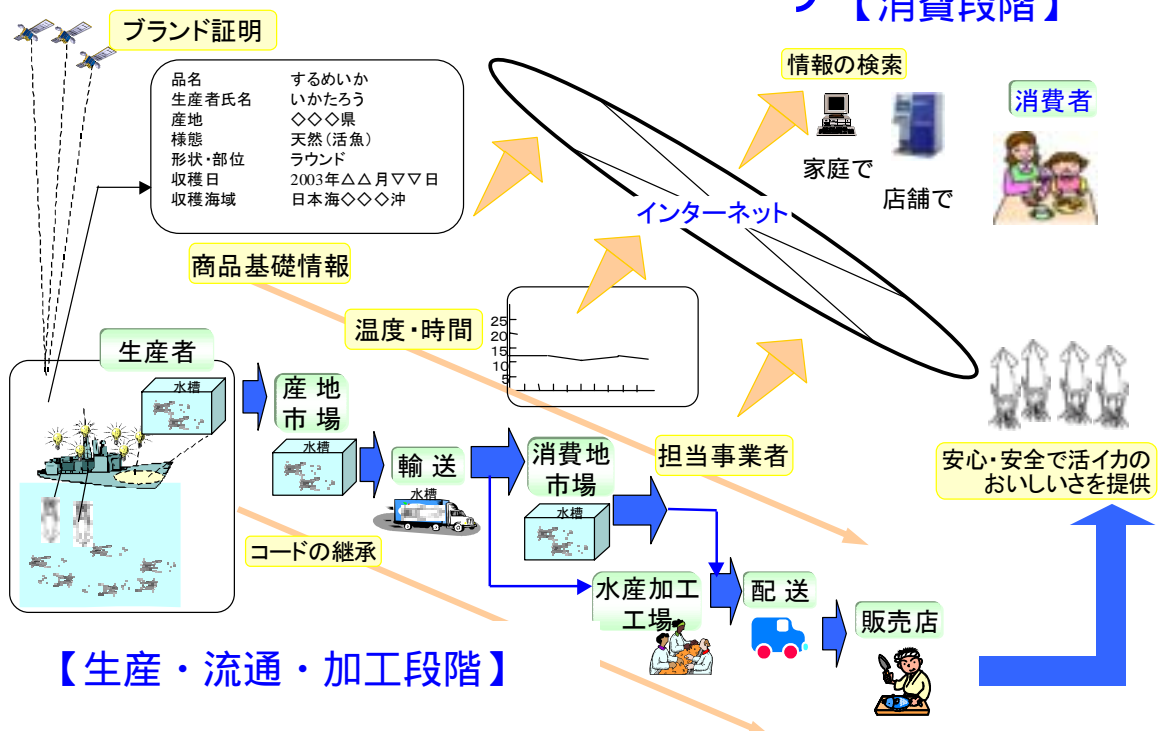
「トレーサビリティシステム」を構築する場合、ありとあらゆる正確な情報を記録し、瞬時に必要な情報を取り出せなければ、その価値はありません。ICタグは情報記録、伝達媒体の道具および証拠書類となるものです。ICタグ自体もある程度の記録媒体となりますが、ICタグを通じて大容量の情報を取り出すための通信装置にもなります。ICタグがついている商品の料理法やそれに関する各種の膨大な情報をその場で取り出すこともできます。

島根県と本プロジェクトの関わり

3年間のプロジェクト研究のうち平成15年度は、美保関町漁協と京阪神を結んだケンサキイカの活魚輸送試験を実施し、「トレーサビリティシステム」構築のための情報収集を行う予定です(図)。また、同漁協を基地として、美保湾で漁獲されるマダイの活魚輸送についても検討中です。

活魚出荷に係わる「トレーサビリティシステム」の先導的生産地として本県の美保関町漁協の役割は重大ですが、真のブランド化推進の第一歩となることは間違いないのではないかと考えています。そして、本県が目指すブランド化推進にも波及することを期待しています。

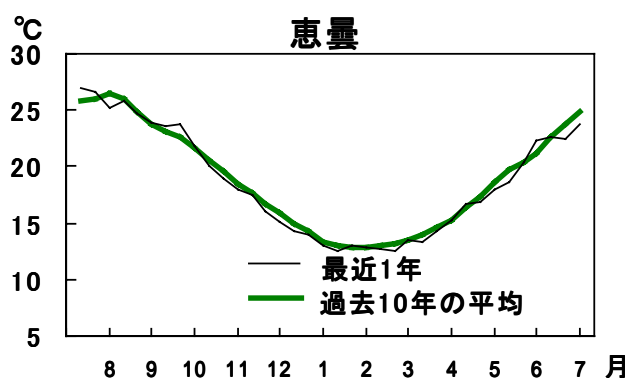
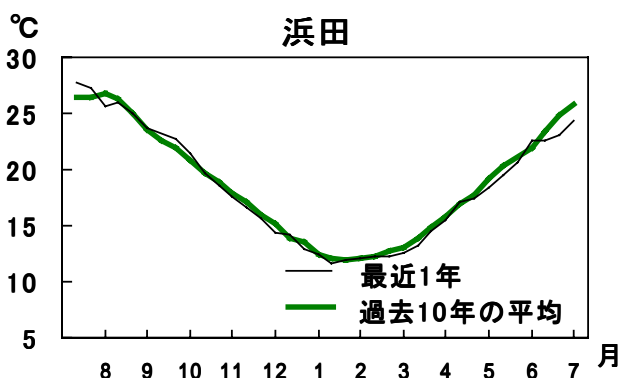
活魚・鮮魚の高付加価値化 トレーサビリティシステム技術の開発(活イカの例)



《 7月の海況 》

7月	月平均	平年差	評価
浜田	23.4	-1.3	かなり低め
恵曇	23.0	-0.8	やや低め

7月の月平均水温は6月に比べ浜田、恵曇ともに2.5 高くなりました。7月は梅雨が明けず冷夏の影響で、平年を大きく下回る結果となりました。浜田では「かなり低め」、恵曇では「やや低め」でした。



島根県・鳥取県・山口県の各水産試験場が実施した海洋観測結果(7/28～8/6)によると、各層の水温は、表層(0m)が21.7～26.8(平年差は-3.0～0.0)、中層(50m)が10.5～21.3(平年差は-5.5～+5.6)、底層(100m)が7.8～17.9(平年差は-3.0～+8.1)となっています。

沿岸域の水温は、梅雨が長引いたことも影響し、全海域で平年を下回りました。特に隠岐諸島東側海域では、山陰・若狭沖冷水域が発達した影響で平年より約3 も低くなりました。中、底層では、隠岐諸島の西約80マイルに南北に長く広がる島根県沖冷水域と隠岐諸島の北北東約60マイルに中心を持つ山陰・若狭沖冷水域の2つの冷水域が見られました。これら冷水域の中心付近の水温は、平年を大きく下回りました。逆に、2つの冷水域に挟まれた海域では暖水域が形成され平年を大きく上回り、隠岐諸島北北西の海域では8 も高くなっていました。

山陰沿岸海域の水温は、表層では「かなり低め～平年並み」、中層では「はなはだ低め～はなはだ高め」、底層では「かなり低め～はなはだ高め」となっています。

《 7月の漁況 》

【中型まき網漁業】

浜田の中型まき網の総漁獲量は、マアジ主体に368トン、総水揚金額は6,055万円でした。1統当りの漁獲量は123トンで、平年(過去5ヵ年平均)の69%、前年の131%となりました。水揚金額は2,015万円で、平年の83%、前年の133%でした。西郷では、マイワシ、マアジ主体に総漁獲量1,222トン、総水揚金額は1億8,000万円でした。1統当りの漁獲量は204トンで、平年の42%、前年の72%となりました。水揚金額は3,000万円で平年の69%、前年の88%となりました。浦郷ではマアジ主体に総漁獲量552トン、総水揚金額は9,268万円でした。1統当りの漁獲量は138トンで、平年の50%、前年の88%となりました。水揚金額は2,300万円で平年の94%、前年の78%となりました。浜田地区ではマアジ、西郷でマイワシ、浦郷でウルメと、それぞれの地区で主体となる魚種が異なっていました。西郷では久々にマイワシの大漁がありましたが、今後マイワシが捕れるかどうかは疑問です。

【イカ釣漁業】

浜田港に水揚げするイカ釣船(5トン以上)の漁獲量は、ケンサキイカ、スルメイカを中心に150トンで、平年(過去5ヵ年平均)の2.2倍、前年の2.8倍と前月に引き続き好調に推移しました。浜田に水揚げされたスルメイカは20入りが主体、ケンサキイカは2段～3段半が主体となっています。

【ばいかご漁業】

石見および出雲地区のばいかご漁業の水揚げは43.9トン、2,486万円でした。このうちエッチュウバ

イは銘柄「大」を主体に 34.2 トン、1,692 万円の水揚げがありました。またエッチュウバイの 1 航海当りの水揚げは 464kg、22.9 万円で、前年に比べ量は 44%、金額は 14%上回りました。

【シイラまき網漁業】

石見海域(大田市・和江・五十猛・仁摩町)における、シイラまき網漁業の水揚げは約 245 トン、3,790 万円と量は前年の 119%、金額は 71.3%となり、低調な漁模様となりました。魚種別漁獲量ではシイラが 83%、ヒラマサが 14%を占めますが、前年と比較するとシイラが約 2 倍、ヒラマサは 3 分の 1 とヒラマサが前年に比べ大きく減少しています。シイラは 2kg 前後、ヒラマサは 1kg 前後のサイズが中心となっています。

【定置網漁業】

県東部では漁獲量・水揚金額とも前年および平年並みでしたが、県西部では漁獲量・水揚金額ともに前年および平年を下回りました。隠岐では漁獲量・水揚金額ともに前年並で、平年を上回っています。県東部ではブリが主体で前年の約 4 倍の漁獲量となっており、その他ではマアジ、ケンサキイカ、サバ類などが漁獲されています。県西部と隠岐ではマアジ、ケンサキイカが主体で、その他に県西部ではヒラマサ、ブリが、隠岐ではサバ類、カワハギ類などが漁獲されています。

【釣・縄】

県東部では漁獲量・水揚金額ともに前年および平年を下回りましたが、県西部と隠岐では漁獲量・水揚金額ともに前年および平年を上回りました。県東部と県西部ではケンサキイカが主体で、その他に県東部ではイサキ、スズキが、県西部ではメダイ、スルメイカなどが漁獲されています。隠岐ではメダイ、カサゴ・メバル類が主体で、その他ではキダイ、ケンサキイカなどが漁獲されています。

漁獲統計

平成 15 年 7 月 1 日～31 日

漁業種類	水揚港	延隻数・統数	主要魚種	1 隻(統)1 航海当漁獲量	総漁獲量
中型まき網	浜田	50	マアジ	7.4 トン	368 トン
	西郷	108	マイワシ、マアジ	11.3 トン	1,222 トン
	浦郷	67	ウルメイワシ、マアジ	8.2 トン	552 トン
イカ釣り (5 トン以上)	浜田	643	スルメイカ、ケンサキイカ	425Kg	128 トン
	西郷			Kg	トン
ばいかご	大田市	36	エッチュウバイ	625kg	22.5 トン
	和江	13	エッチュウバイ	466kg	6.1 トン
	仁摩	24	エッチュウバイ	414kg	9.9 トン
シイラまき網	大田市	18	シイラ、ヒラマサ	1,822Kg	32.8 トン
	和江	78	シイラ、ヒラマサ	1,782Kg	139.0 トン
	五十猛	30	シイラ、ヒラマサ	1,527Kg	45.8 トン
	仁摩町	15	シイラ、ヒラマサ	1,827Kg	27.4 トン
定置網	浜田	72	マアジ、ヒラマサ、ケンサキイカ	444kg	32.0 トン
	美保関	104	ホソトビウオ、サバ類、ケンサキイカ	994kg	103.4 トン
	浦郷	83	マアジ、ケンサキイカ、サバ類	311kg	25.8 トン
釣・縄	浜田	1596	ケンサキイカ、メダイ、ヒラマサ	24kg	37.8 トン
	五十猛	490	ケンサキイカ、スルメイカ	36kg	17.8 トン

1 隻(統)1 航海当漁獲量は総漁獲量 / 延隻数・統数で算出しており四捨五入した値です。

西郷のイカ釣りは漁協合併に伴うシステムの変更のためデータが集計できませんでした。